

番所山について

1. 標高 32.5m の番所山一帯は、田辺湾の南端に位置し、円月島や塔島を望む風光明媚な自然公園。
その昔、寛永 20 年（1643 年）、この地に遠見番所が置かれ異国船の監視に当たったことから「番所山」と呼ばれるようになりました。（田辺与力＝江戸時代の武士が交代で監視）
古くは植物園・動物園・遊園地がありにぎわっていました。今はなくなりましたが、展望台・遊歩道・芝生広場が整備され、自然と親しみ素晴らしい景観が楽しめる公園になっています
2. 世界的博物学者・南方熊楠の記念館である。 熊楠の業績顕彰と文献・標本類・遺稿・遺品等膨大な資料の保存と公開および学術振興を目的として 1965 年 4 月に開館した。収蔵資料の一部が写真や年表とともに解りやすく展示されている。本館の耐震補強工事と新館建設が行われ、本館は 2016 年 11 月 9 日から休館。2017 年 3 月 19 日に新館がオープンすると同時に本館も再開館した。【大正 11 年（1922 年）京都大学瀬戸臨海実験所が開設。昭和 4 年（1929）昭和天皇が番所山に行幸。昭和 8 年（1933）番所山遊園地・植物園・動物園が整備され、S30 年（1955）番所の鼻灯台を設置。S40（1965）4 月南方熊楠記念館オープン。1917 年ミュージアム完成】

3. 南方熊楠記念館建設之碑

昭和 4 年 6 月 1 日 天皇陛下は御召艦長門に乗御供奉の那智灘風外 6 隻を従えさせられ威風堂々南紀に行脚 田辺湾に御入港の際 本県が生んだ世界的大学者南方熊楠翁は湾内神島の御案内役を勤め 又御召艦上で生物学について御進講申し上げた 神島には

「一枝も心して吹け沖つ風 わが天皇（すめらぎ）のめてましし森そ」
との翁赤誠の歌碑がある その後昭和 37 年 陛下は再び当地へ行幸の際 往年を御回想になり今は亡き南方翁追懐の御歌をお詠み遊ばされた

「雨にけふる神島を見て紀伊の国の生みし南方熊楠を思ふ」
吾等県民はこの君臣水魚の誉と南方翁の偉大なる業績を永遠に遺さんとし 風光絶佳しかも陛下の御思出深き神島を指呼の間に望むこの地を選び常陸宮殿下の御鋤入れを賜り 総工費 3600 万円を投じて 昭和 40 年 3 月この記念館を完成 御製碑と両々相まって不朽の記念とした
昭和 40 年 4 月

4. 円月島の成り立ち

和歌山県白浜町の臨海港に浮かぶ島、「円月島（えんげつとう）」。南北 130m、東西 35m、高さ 25m の小さな無人島で、正式名称を「高嶋（たかしま）」といいます。円月島という名前は通称で、名前の由来は、島の中央に円月型の海蝕洞（波浪による浸蝕でできた洞窟）があること。直径約 9m の穴がぽっかりと開いています

1887 年ごろに来遊した津田正臣が読んだ五景詩のうちの「円月島」に始まり、1889 年発行の「紀州西牟婁瀬戸鉛山温泉図」には、絵画や漢詩とともに円月島の名が登場。さらに 1908 年の「紀州田辺湯崎温泉案内」によって、円月島の名は広く知られるようになった

5. 津田正臣 日本政治家 初代和歌山県知事

6. タブノキ（クスノキ科 タブノキ属 常緑高木 暖地海岸沿いに自生）

タブノキの葉は、長さ 8～15cm、幅 3～7cm。海岸の風衝地では小さく、波打つ葉となる傾

向がある。葉の最も幅広い部分は先端よりにあり、長さ 2～3cm の葉柄に向かって次第に幅は狭まる。先端は急に狭まって鈍頭。両面無毛で、裏面は灰白色。頂芽は大きくて目立つ。花芽は球形に近いが、葉芽は幅は長さの半分程度。タブノキの葉は粘液を含んでいる。葉柄を切り離し、もう一度くっつけてゆっくり離すと粘液の糸が伸びる。本種の同定ポイントの 1 つである 北海道、青森及び岩手を除く日本全国に見られる。漢字表記は「榺」だが、本来、中国では「楠」と表し、南方系の樹木であることが分かる。日本以外では中国南部、韓国（済州島のみ）、フィリピンなどに自生する。

名前の由来には諸説あるが、古代朝鮮語で丸木舟を表す「トンバイ」がタブに転訛したとする説が有力である。また、タブノキは日本書紀に登場するほど神事との関連が深く、「霊（たま）が宿る木」を意味する「タマノキ」から転訛したという説もある

樹皮は線香の原料になる。

- ・タブノキは幹が真っすぐに伸び、樹高が最大 30 m、直径が 3.5 m にもなることから、船を作るのに使われる。古代に朝鮮半島から渡来した丸木船は全てタブノキで造られたほど日韓交易に貢献している。
- ・材質はやや硬くクスノキに似るが、クスノキに比べて用途が少ないため「イヌグス」という別名がある。建築、家具、枕木、彫刻、パルプ、器具（臼や木鉢）に利用され、その歴史は縄文時代まで遡る。材の色合には個体差があり、赤みを帯び、より良質とされるタブ材をベニタブ、白っぽいものをシロタブと呼んで区別する。また、木目に巻雲紋が出るような老木を特に「タマグス」として珍重する。
- ・タブノキは耐潮性に優れ、地下に海水が浸入するような土地や波打際でも育つ。このため、魚群を追い込んで捕獲する「魚つき林」として使われ、各地の海辺にはその名残となる大木が多い。・葉は細長い楕円形で長さは 8～15 センチ、幅は 5 センチ前後だが、中央よりやや葉先の方が幅が広い。縁にギザギザがなく、先端は丸みを帯びる。厚い革質で光沢があり、これによって塩害を防いでいる。クスノキと混同される例もあるが、クスノキに特徴的な目立った葉脈はなく、葉の形状はマテバシイやカゴノキに近い。
- ・葉は小枝の先に集まって枝から互い違いに生じるが、その密度が高いため防風林や防火樹に使われ、火を伏せる木として信仰されることもある。葉をちぎれば特徴的な香りがあり、かつては蚊取り線香代わりに使われることもあったが、クスノキほどの強い香りではない。
- ・タブノキが寒さに強いのは冬芽が画像のように「芽鱗」でしっかりと覆われているため。枝先には夏でも大きめの芽があることが多い。葉芽は春になるとまるで別な生き物のようにダイナミックに展開するが、特に早春はピンク色を帯びていて花のように見える。ちなみにクスノキは春になると短期間で一斉に全ての葉を入れ替える習性を持つが、タブノキは 2～3 年かけて葉が入れ替わる。
- ・本当の花が咲くのは 4～6 月頃。直径 5 ミリほどの黄緑色の小さな花が円錐状に群がって咲くがあまり目立たない。花の後には直径 1 センチほどの緑色の実ができ、7～9 月頃になると黒紫に熟す。果肉が少なくエグ味があるものの、食べられなくはない。ムクドリやタヌキなどはこれを好物とし、種子を拡散している。ちなみに南米原産のアボガドはタブノキと同じクスノキ科（ただしワニナシ属）の樹木であり、日本ではタブノキが最もアボガドの木に近い性質を持つ。
- ・樹皮は明るい褐色で皮目と呼ばれるボツボツが点在するが肌触りは比較的滑らか。老木になるとゴツゴツし、網目状に裂けてくる。粉末にした樹皮（榺粉という）は水に溶かすと糊状になることから線香を作るのに使われた。また、樹皮にはタンニンを多量に含み、これを煎

じた汁は八丈島の絹織物「黄八丈」を染め上げる染料となる。